

高島市 歴史散歩

No.3

高島市を通る街道と道標

近江国（滋賀県）は、よく「交通の要衝」と称されます。その理由の一つには、近江国が地理的に東日本と西日本の接点に位置し、古くから日本の幹線道が通り、それを結ぶ主要街道や間道が多く発達したことがあげられます。

特に江戸時代には、近江国内を東海道・中山道・北国街道・松街道・御代参街道・八風街道・朝鮮人街道・北国街道・北国脇街道・若狭街道などの各街道が通り、多くの人や物資や情報が行き交うようになりました。

こうした「道の国」である近江



南市の石敢當



保坂の道標

には、江戸時代後期ころ、多くの道標が建てられました。道標とは、道の分岐点や曲がり角に建てられた石柱で、これには行き先とその方向、距離などが刻まれています。高島市内でも、北国街道や若狭街道の曲がり角などに、江戸時代に建てられたいくつかの道標を見ることが出来ます。

安曇川町田中の南市の交差点には、天保13年（1842）に北国街道と間道の接点に建てられたと思われる道標があります。この道標には、表面に「石敢當」、両側に「すく 京 大津道」「す

高島市

く「北国街道」と刻まれています。「石敢當」とは中国伝来の民間信仰で、魔よけの意味とされるものです。石碑にこの文字が刻まれる例は、九州南部や沖縄でよく見られますが、滋賀県内では、唯一のものと思われます。

また今津町保坂の若狭街道の分岐点に建つ道標は、安永4年（1775）の建立で、行き先は「京道」「わかさ道」「しゅんれいみち」の3方向を示しています。「しゅんれいみち」とは西国33カ所観音霊場の巡礼道のことです。ここでは、第30番札所である竹生島の宝蔵寺へ向かう道を案内しています。

高島市内には、このほかにも藤樹書院や近藤重威の墓の場所を示した道標なども残されています。みなさんも街道を歩く機会があるときは、ぜひ道端の道標を探してみてください。（文化財課）

編集後記



退任式で職員より花束を受け取る
玉田市長職務執行者。

▼元日より市長職務執行者として職務にあたられた玉田市長職務執行者の退任式が、2月10日市役所1階エントランスで行われました。新市長が決まるまでの間、動き始めた高島市の脱取りを務められた玉田氏。職員への最後のあいさつで「（新市の）産みの苦しみはもうしばらく続くと思いが精一杯頑張って欲しい」と述べました。▼酒東市長のものと、皆さんと一緒に高島市の未来を創っていきたいと思います。大切なのは高島のことをもっとと知ることに。このまちの隅々まで見て、聞いてまいりますので、その時にはどうぞよろしくお願ひします。（広報担当）

高島市 歴史散歩

鵜川四十八体仏

白鬚神社から国道161号を北上してすぐの山際に、旧西近江路とされる道があり、この道をあがった丘陵上には、花崗岩で造られた33体の石仏群があります。これらは鵜川四十八体仏と呼ばれ、長年の風化で表面の摩滅が進んではいますが、容貌や衣文の掘り出しの技法などから、室町時代後半ころに造られた阿弥陀如来坐像であると考えられています。この石仏は、観音寺城（安土町）の城主で、近江守護を務めた六角義賢が、天文22年（1553）に、亡き母の供養のために造立したものとされ、義賢は、観音寺城のある湖東から、この湖西の鵜川の地を阿弥陀如来の住む西方浄土に見立てたのではないかと考えられています。

なお、48体のうち13体は天津市坂本に運ばれ、江戸時代以降の天台座主の墓や、徳川家康の供養塔などがあることで知られる慈眼堂の境内に、現在も安置されています。他の2体は、盗難にあい現在は行方不明です。

高島市内では、鵜川四十八体仏と同じ作風を示す大日如来像ほか4体の石仏が、安曇川町田中の玉泉寺に伝わっています。

（文化財課）



う かわ しじゅうはつたいぶつ
鵜川四十八体仏(県指定史跡)



ぎよくせんじせきぶつ
玉泉寺石仏

高島市

No.6

山中の関所跡

今津町から国道303号を西へ向かい、水坂トンネルを越えて福井方面へしばらく進むと、国道の左下に数件の家並みが見えます。ここは、江戸時代には「山中」と呼ばれた街道沿いの集落で、今津と小浜を結ぶ九里半街道中の唯一の関所である山中関がおかれていたことで知られています。

江戸時代、幕府は治安維持のために、全国の街道の要衝に関所を設けました。滋賀県は複数の街道が交差する交通の要衝であったため、九里半街道の山中関のほか、マキノ町には七里半街道の剣熊関、余呉町には北国街道の柳ヶ瀬関がおかれていました。

現在、山中の関所はその形跡を伝えてはいませんが、地元での言い伝えによると、集落内に近年まで残っていた「御茶屋」と呼ばれる民家が番頭の詰所で、関所はその東側にあったとされています。また、江戸時

代に書かれた記録によると、山中関には番頭と呼ばれる武士2人が15日交代で詰めていて、ほかに中番2人と下番5人がいたとされています。また、関所が開けられるのは「明け六ツ(午前6時ごろ)」で、「暮れ六ツ(午後7時ごろ)」には閉められ、関所が閉まっている間は、急飛脚などのほかは、たとえ大名であっても通ることはできなかったと記されています。

現在の山中は住民の移動や家の建て替えなどが進み、その姿は変わっていますが、集落を通る旧街道の道筋と、それに沿って続く家並みの面影からは、関所がおかれ多くの旅人で賑わった村の様子がしのばれます。

(文化財課)



山中の関所跡付近

北船木の若宮神社

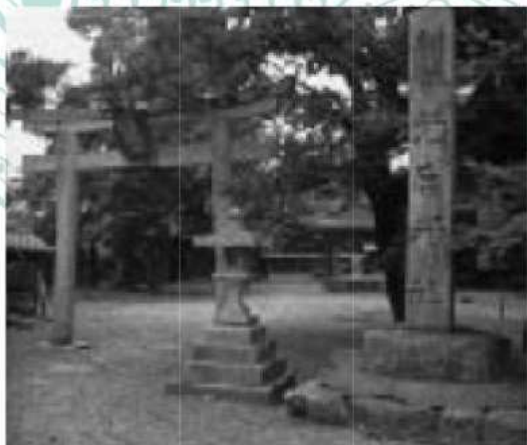
安曇川河口付近の安曇川町北船木の集落南端に位置する若宮神社は、滋賀県でも有数の中世神社建築である本殿を持つことで知られています。この本殿は、現在も残る建立棟札によると、明応6年(1497)に佐々木能登守長綱が建立したもので、当初は若宮権現社と呼ばれていました。その後、天文4年(1535)、慶長6年(1601)、正保3年(1646)、享保3年(1718)、寛保2年(1742)、寛政7年(1795)等に、屋根葺き替えを中心とする修理が行なわれていますが、現在にいたるまで、中世当時の古材と建築様式をよく伝えているとされています。

この若宮神社の創立沿革について、詳しいことは分かっていませんが、この地には、平安時代に賀茂別雷神社(上賀茂神社)の安曇川御厨があり、北船木の人々が安曇川の川魚を献上していたりすることから、若宮神社は上賀茂神社の分霊をまつたことが始まりではないかともいわれています。

また、神社には寛治3年(1089)の奥書が残る大般若經が伝えられていて、これは16世紀初頭ころから北船木の御経として若宮神社で守られてきたことが分かっています。

江戸時代後半になると、境内建物の新築や祭神の勧請などが盛んに行なわれ、明治時代には村社、昭和初期には郷社となり多くの氏子の崇敬を集めました。

本殿は、昭和50年代に滋賀県などによって建築調査が進められ、昭和58年に県指定有形文化財に、次いで平成5年には国の重要文化財に指定されました。(文化財課)



北船木の若宮神社

安曇川の歴史を伝える橋 — 安曇川大橋・本庄橋・常安橋 —

県下有数の大河である安曇川には、数多くの橋が架けられ、現在の人々の生活になくはならないものとなっています。

旧国道がとおり、現在は県道新旭高島線となっている安曇川大橋は、

木橋時代の安曇川大橋



橋梁に「昭和八年 汽車製造株式会社 製作」と刻まれた鉄板が取り付けられていて、現在の橋が昭和8年に開通したことが分かります。それ以前は木橋で、大正時代に出版された『高島郡案内』には「湖西第一ノ大川安曇川流域新儀村青柳村両所属ナル西近江路二架設セルモノニシテ明治十九年迄八渡船を以テ交通セシヲ同年時ノ知事申請ヲ容レ初メテ架設ス、現時ノ橋ハ明治三十九年六月更ニ架設セシモノナリ」とあり、木橋は明治19年に架けられ、水害等によって明治39年に付け替えられたものであると記されています。

洪水の影響をうけ続けたのは本庄橋で、明治22年、安曇川の太洪水によって川幅が広がり、舟渡しが困難となったために架けられた仮橋が、その始まりといわれています。昭和10年に鉄筋コンクリートの橋に架け替えられましたが、その後も洪水に

よる被害が続き、琵琶湖総合開発による河川改修で川幅が広げられ、橋脚間隔の広い現在の橋が完成して洪水の心配が半減したのは、昭和45年のことです。

昭和33年に現在のコンクリート橋として完成したのは、安曇川町常磐木と新旭町安井川を結ぶ常安橋で、橋の名称は、この両岸の地名の頭文字をとったものとされています。この常安橋も、昭和24年のヘスター台風や28年の台風13号などでは洪水による被害をうけ、流失や復旧を繰り返しました。また、

この橋のわずかに上流には、昭和初期まで「十八川の渡し」と呼ばれる渡し場があったことが知られています。
(文化財課)

現在の常安橋



編集後記



使った後は綺麗にと、グラウンド整備をして帰る受験者の皆さん。(11月12日、大家友和社会人クラブトライアウト(入団試験)より)

▼なんだか知らない内に12月、ずいぶん寒くなってきました。暖房器具も登場し始める季節ですが、市内では少し前から火事が続いています。これから本格的な冬が訪れますが、皆さん体調管理と火の用心にはホント気を付けてください。▼今月号の特集は、高島市が目指す環の郷のまちづくりを紹介。「人と人、人と自然が繋がる」なんて言うところとちょっと難しいかもしれませんが、例えばたくさん造りすぎた煮物をお隣さんにお裾分けしたりとか、在所のみんなで川掃除をするとか、簡単に言っちゃえばそんな事じゃないかなと思います。他人と家族のボーダー(境界)が緩やかな、みんなに優しいまち。人口や面積がどんなに大きくなろうとも田舎は田舎。高島らしさって何だろうってみんなでコタツに入りながら話してみたいですね。▼秋はイベント真つ盛りのシーズンでした。色々な所の秋のお祭りにお邪魔しましたが、去年まで隣町だった所からの出店が沢山ありました。これも市になって生まれた新しい繋がり「環の郷」ですね。
(広報担当)

高島市 歴史散歩

No.13

後一条天皇の伝承が残る庭園跡

―朽木村井地区・池の沢遺跡―

朽木の村井地区には、後一条天皇（在1016～1036年）の伝承が残る通称「池の沢」と呼ばれる庭園遺跡（池の沢遺跡）が存在します。池の沢遺跡は、安曇川の河岸段丘上にあります。崖と山に囲まれていることから、かつては人が簡単に出入りできない場所でした。

庭園跡には、南北80㍎・東西32㍎の三日月状の池が現存します。池の中には、中島や浅橋状の遺構が残り、護岸には玉石敷や洲浜などが確認できます。池の周囲には平坦地が広がり、土塁や石積が残っています。このことから、この庭園では中島に橋をかけ、池で船遊びが行われ、周囲には建物が存在していたとされています。また、安曇川に張り出すように巨石（通称…天狗岩）も存在します。岩には柱

穴があけられ、ここにも建物が存在したようです。これらは平安時代の庭園の特徴とされています。この池の沢には、次のような伝承も残っています。

「その昔、後一条天皇には二人の内親王の他に、もう一方の皇子がお産れになられた。しかし、この皇子を御所でお育てになるには、はばかれるところがあつたようで、時の藤原氏の一族がこの皇子を奉ぜられて朽木谷まで来られた。一行は村井の池の沢に屋敷を構え、ここで皇子を育てられた。都から皇子をお守りし、ここに住んでいた藤原の家臣やその子孫は藤原の姓を名乗って



「天狗岩」



「庭園全景」

いた。朽木の領主は、藤原の姓を遠慮するようにとのお達しを出され、藤原の一字を頂いてその姓とした。」と言い伝えられています（『朽木の昔話と伝説』より）。

現在でも村井地区には、皇子を「御一条さま」として祀る八幡神社や藤原の姓が存在することから、伝承とのつながりを連想させます。

（文化財課）

編集後記



みんなでコネコネ。まあいとお餅が完成！お昼に焼き餅にして「かうどん」にいただきました。（12月6日静里なのはな園（新旭））

▼新年明けましておめでとうございます。今月は新年＆市誕生三周年記念のインタビュー特集を掲載（2・3頁）。取材させていただいた方に共通して感じたのは「自分はこのまちで主人公として生き生きと生きていました。時代やまちの形・生活が変わっていく局面で自分の役割は何か、もっと真剣に考えてみてはと教えていただいた気がします。ご協力ありがとうございました。」行政の取り組みが「解りにくい」「勝手にやっているのでは」というお叱りの声をいただきます。どうしても二方的になりがちな市の情報、もっと丁寧にお伝えする事を新年の抱負にしたいと思っています。▼行政だけでは網羅できない民間情報や店舗情報等を集約して身近に知ってもらおうとの想いから、今月より市公認地域ポータルサイト（インターネット上の地域情報の総合的な窓口）が動き始めます。（正式オープン）は3月1日。詳しくは市HP参照）素敵なサイトになるように皆さんの声を届けてください。今年もよろしくお願ひします。（広報担当）

長期間続いた集落跡 〜今津町弘川地区〜

今津町弘川地区の東部に位置する水田地帯には、弥生時代後期(2世紀後半)から飛鳥時代(7世紀後半)にかけての住居跡等がこれまでの調査で多数見つかっています。高島市教育委員会では今津水泳プールと今津弘川公園整備に先立ち、平成16・17年度に今津中学校の南に位置する水田で発掘調査を実施しました。

調査の結果、調査区の中央で幅3〜7メートルの河川跡が、その北側から5棟の竪穴住居跡と5棟の掘立柱建物跡、南側からは10棟の竪穴住居跡が発見されました。これらの住居跡などからは当時の生活やまつりごと

に使用した土器が多量に出土しました。これらの土器を考古学の方法で詳細に分析していくと400年近くにわたって途切れることなく住居が順次営まれていったことがわかってきました。また、住居跡は大型のものが多く、最大の住居跡は現在の畳数で約42畳、

当時としては最新の技術で建てられた掘立柱建物跡も約30畳の広さをもつ大型のもので相当有力な一



竪穴住居跡



出土した土器類 (3世紀後半)

族が住んでいたと考えられます。弘川が若狭などの北陸諸国の塩や海産物などの中央への安定供給のための交通の要衝に位置したことが長期間続く大集落を生み出したひとつの要因ではなかったかと考えられます。

(文化財課)

編集後記



『頑張れ！朽木キャンペーン！』家族で、友達で、春の朽木にお出かけしましょう！写真は「朽木温泉てんくう」

▼今月号の表紙では、3月19日に行われた「さとやま劇場」の様子をご紹介します。260人を超える出演者が織り成す二時間超の舞台には見所が沢山ありました。その全てを誌面で紹介出来ないのが残念ですが、観に来られた皆さんはきっと故郷の事を今までより知って、一層好きになられたのではないかと思います。▼先日ある講演会で「町村合併についての、新しく自己紹介を繰り返す覚悟なんだよ」と仰られた方がありました。また、さとやま劇場に出演した子ども達の作文の中に「まちが一つになるために、もっとまちの事を知ろう」という言葉がありました。市になつて2度目の春。この春は、市内のまだ訪れた事のない所に行ってみませんか？▼先月上旬に朽木で発生した土砂崩れによる国道367号線通行止めの影響で朽木に来るお客さんが激減し、観光や商売関係者の方がとても困っておられます。こんな時こそみんなで朽木に遊びに行つて、朽木を応援しませんか。温泉や森林浴、それに美味しいお店がいっぱいの朽木の春を盛り上げに、みんなで朽木に出かけましょう。

(広報担当)

高島市 歴史散歩 No.18

湖西の人々の生活を支えた江若鉄道

昭和44年にその役割を終えるまで、湖西住民の生活に最も密着した鉄道であった江若鉄道の車両が、高島市内を走るようになったのは、昭和2年に北小松駅―大溝駅(後に高島町駅と改称)間が開通したときのことです。

江若鉄道は、その名前のとおり、近江(滋賀県)と若狭(福井県南部)を結ぶ鉄道として、明治時代末ころから建設の計画が進められてきました。許可の規定が厳しかったことや膨大な費用がかかることから、実行に移るまでには時間を要し、大正8年に建設の免許が下された後も、工事は集められた資金に応じて進められ、全線が開通して終点の近江今津駅が開業したのは、昭和6年1月のことでした。その後江若鉄道は、通勤、通学、買い物などで地域住民に幅広く利

用されたのはもちろんのこと、夏には湖岸に点在する水泳場、冬には箱館山・マキノなどのスキー場へ向かう人たちのレジャー用列車としても活躍しました。

高島市内には、廃線当時、南から順に、白鬚・白鬚浜(臨時駅)・高島町・水尾・安曇川・新旭・饗庭・北饗庭・近江今津という9駅がありました。現在駅舎の建物が残っているのは、近江今津駅のみで、線路敷は一部が湖西線に引き継がれました。

●江若鉄道の写真・思い出をお寄せください！

教育委員会では大津市歴史博物館でこの夏に開催される「ありし日の江若鉄道」展に向けて、皆さんが持ち前の江若鉄道の写真と思い出話を募集しています。採用分は展覧会の「江若鉄道の思い出写真」のコーナーに展示させていただきます。

昭和44年11月1日、江若鉄道のお別れ列車が運行されることになり、市内の沿線各所に江若鉄道の最後の姿を見送る多くの人々が集まりました。

(文化財課)



ます。今は見ることでできない江若鉄道の思い出を皆さんぜひお寄せください。詳しくは文化財課 ☎(32)4467または大津市歴史博物館 ☎077(521)2100へお問い合わせください。

編集後記



田んぼで育てているのはお米だけ？いえいえ！ほうら顔を出したでしょ。

(高島市畑にて)

▼晴れ渡った五月の空は心を爽やかにしてくれます。「さつき」は、早苗月の路で、田植えに由来するとか。田植えは昔から辛い農作業の一つでしたが、今では立派な機械がボロロロンと軽快な音とともに人の何十倍もの速さで田植えをしてくれます。一粒からもう出た苗は、やがて万倍の恵みを与えてくれます。田んぼの水面に映えるそんな苗には、ひと冬越えて蓄えられた生命が満ちあふれています。▼今月の表紙は、5月3日から5日にかけて行われた少年サッカー大会の様子をご紹介します。今年はカラーガード隊がオープニングに花を添え、市商工会が物産展や抽選会で大会を盛り上げてくださいました。友好を深め、実力を競い合った3日間。優勝杯を高島にとこの大会に臨んだ地元チーム。ボールを懸命に追う彼らのまなざしには、生気が満ちあふれていました。惜しくも準々決勝で敗退しましたが、この日の悔しさは、きっと彼らの可能性を万倍にしてくれそうです。

(広報担当)

高島市 歴史散歩

No.19

蒸気船時代の賑わいと棧橋の成立

琵琶湖に最初の蒸気船「一番丸」が登場したのは、明治2年(1869年)3月のことです。この「一番丸」は、船体の横に大きな水車をつけた外輪船で、大津と海津間で運航を開始しました。これに続いて、同年6月には「一番丸」が、4年2月には海津の船問屋・磯野源兵衛によって建造された「湖上丸」が就航するなど、数年の間に琵琶湖には多くの蒸気船が行きかうようになりました。ところが、船の数が増えた結果、蒸気船間の競争が激化し、過積や無理な速力アップによる沈没などの事故が相次ぐようになりました。滋賀県では、こうした事故を未然に防ぐため、汽船取締会所を設けるなどの対処策を講じましたが、沈静は一時的なものではありませんでした。汽船間の競争が続く一方、この

時代は、新たな交通体系である鉄道の敷設が滋賀県下におよんできた時期でもありました。東海道線の当初の敷設計画は、琵琶湖水運を利用できる大津と長浜間の敷設を省略し、京都と大津間および長浜と敦賀間から工事を進めるというものでした。

こうした計画が進むなか、大津と長浜間を鉄道連絡航路として新たに整備する計画がもちあがり、大阪の実業家・藤田伝三郎とこれまで湖北を営業地域としていた船主たちの合同で、明治15年5月、太湖汽船会社が設立されました。本社は長浜におかれ、貨客取扱所と呼ばれる支社が今津・船木・大溝(現、高島市)・長浜・塩津に設置されました。

ただ、開業当初、高島市内の各港には棧橋がなく、しばらくの間

は小船が大型蒸気船と港を結び役割をしていました。棧橋は、地元住民たちの合資による会社の設置により建造され、明治33年に勝野と今津、38年に海津、41年には船木に棧橋が完成しました。さらに42年には深溝港の開港に尽力した藤本太平次の献身的な努力によって、深溝港にも棧橋が新設されました。こうして、昭和初期の江若鉄道の開通までの間、太湖汽船は高島の人々にとってもっとも身近で重要な交通手段として活躍するようになりました。(文化財課)



編集後記

美しい海津の桜トンネルをつくるのは、「肥料」とこれを支える「人の心」です。

(マキノ町海津にて)

▼梅雨空の雲の切れ間から降り注ぐ太陽が、夏の訪れを予感させます。汗ばむほどの日差しを遮る海津大崎の桜並木は、木々の葉を色濃くし、湖面にその姿を映し出しています。この地域の誇りをいつまでも守り伝えていこうと、多くの市民の皆さんが保全活動に参画されています。中には、同窓会活動として取り組まれている方もあり、これまでに培われた人と地域のつながりが、この活動には根付いています。▼今月の表紙は、6月16日に行われた新旭養護学校高等部の花販売交流の様子をご紹介します。立派に育ったマリーゴールドやペゴニアなど、数種類の花苗をリヤカーに積んで地域を回る姿は、もうすっかり夏の風物詩になっています。生徒たちから地域の人たちへ託された花苗は、地域でしっかりと根を張り、美しい花が行き交う人の心を和ませてくれるでしょう。そんな光景を思い浮かべながら、人と地域のつながりに置き換え見るのは、私だけでしょうか。

(広報担当O)

高島市 歴史散歩 No.20

踊り歌の成立と高島音頭

盆や地藏盆のころに各地で踊られる盆踊りは、全国各地に郷土色豊かな踊りと踊り歌が伝えられています。高島市には、一般的に「高島音頭」と総称される踊り歌の伝承が知られています。この「高島音頭」にも、歌の文句や節回し、また踊り方などに、それぞれの地域の特徴があり、呼び名も地域の名称を冠したものや、朽木地域に伝わる「ヤッサ踊り」などのようにさまざまなものがあつたと思われまゝ。ただ、音頭の調子や節回しなどから考えると、市内各地に伝わる踊り歌は、多くが同一系統のものと考えることができます。

一般的に盆踊りは、お盆のときに各家々に帰ってくるといわれる祖霊の歓待と鎮魂のために始められ、室町時代のころには一般の人々の間に広まるようになったといわれ

ています。当初は祖霊をなぐさめるものとして念仏の色彩が強いものでしたが、家に迎えた祖霊に喜んで帰ってもらいたいといった意味あいから、踊り歌は次第に軽快でリズムカルなものになり、さらに歌の文句にはお国自慢が取り入れられるなど、盆踊りの行事そのものが地域社会のイベントとして多くの人に親しまれるようになっていきました。

「高島音頭」については、その起源や詳しい由来はわかっていませんが、昭和2年に出版された『高島郡誌』によると、この地域では古くから盆踊りが行われていたが、踊りが時代に合わないようになってきたので、寛政2年(1790)に改変し、このときに初めて各地に櫓を作り、また歌に三味線や太鼓を合わせたといえます。

現在、市内ではいくつかの団体や集落で「高島音頭」が伝承され続けていますが、地域によっては伝承者や踊り手の減少といった課題も発生しています。しかし、一方では市内各地に残る「高島音頭」を、それぞれの特徴を生かしながら、後世へ伝えていこうという活動も進みつつあります。

(文化財課)



2005 近江ふるさと夏祭りでの高島音頭



「おいしそうですね。
とっていいですか？」
「まだ早いぞ。」
「いえ、写真…」
(今津町清水にて)

編集後記

▼稲の穂が張り、高島産まれの野菜が店先に並ぶ八月は、心が活気づきます。市内の畑では、今にもはじけそうなスイカが、麦わらの上に「ずしこ」と横たわっています。いよいよ出番です。▼今月の表紙は、7月15日に行われた「たいさんじ風花の丘」オープニングイベントの様子を紹介しています。ラベンダーの鮮やかな紫色と、すがすがしい香り、そして、子どもたちの笑顔が、この日の暑さを一時忘れさせてくれました。会場では泰山寺八百屋さんがオープン。このお店には品切れなんてありません。見渡す限りの畑には、野菜たちが今か今かと出番を待ちわびています。近くの畑から次々とやってくる野菜たち、輸送にほとんどエネルギーを使わないから、環境にもやさしい。遠くから運んでくると、そのために多くのエネルギーが消費され、農作物を育てる環境にも悪影響を及ぼします。本当に安心安全な農産物は、生産地から食卓までの距離も大切なことに気づきます。そう考えると、高島の農産物を食べることが、体にも良く、地球環境にもやさしく、子どもたちの未来にもつながります。20年後のトマトの味が、今日と変わらないためにも…

(広報担当)